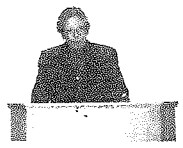
# 社会の構造が浮き彫りに

## 第24回和歌山・人権啓発研究集会

第12回和歌山・人権啓発研究集会が1月27日～28日、白浜町ホテルシーモアでひらかれ、県内各地より行政関係者・企業など約150人が参加した。今年のテーマは、昨年3月11日の東日本大震災・福島原発事故を人権の視点からとりあげた「震災と人権」。

全体集会の講演で「原発は差別で動く―原発を我々がどう捉え、どう考えるか―」と題し、西村秀樹・元毎日放送、近畿大学客員教授から、福島原発は沸騰水型原子炉（BWR）といわれるもので、このタイプは地震の振動に非常にもろい構造であること、内部被爆は放射線の量が微量でも体内にある放射性物質が長期にわたって体の細胞組織を壊していくため、数10年後にガンになることの実態を語り、現場で作業をおこなっているのは東電の職員でなく下請け会社の労働者であることを指摘し、被爆の危険性を語った。


第24回和歌山・人権啓発研究集会
あいさつする野口道彦・和歌山人権研究所理事長

西村秀樹・近大客員教授

中岡幹二・会長

# 青年の掘り起こしを

## 青年対策部会議

県連青年対策部会議が1月26日、県連事務所でひらき、松井資喜青年部長、速水雅樹執行委員、対策部員5人が参加した。

討議の結果、第32回和歌山県連青年部大会を5月15日（日）におこなうことが決まり、昨年ひらかれた全青・全高の報告集会もかねることを決定した。

また、一昨年、青年部オルグの成果を基にした県連青年部活動についても議論され、もう一度、各支部に対して青年部結成と青年の掘り起こしを呼びかけると同時に、日常の交友関係のなかから青年の掘り起こし活動をおこなっていくことを対策部員で確認した。

次に「和歌山県失語症友の会紀の国会の取り組み」を中岡幹二・和歌山県失語症友の会紀の国会会長より、NPO活動の報告とコミュニケーションなどが報告された。そのほか、啓発ビデオ学習、2日目には「社会不安と人権」「災害と人権」をテーマに分科会がひらかれた。

第1分科会
第2分科会

主張

# 「よき日」をめざして

## 歩み続けよう

1922年3月3日、部落差別の撤廃と「よき日」の創造をめざして全国水平社が結成され、今年で90年という節目の年を迎える。

厳しい部落差別や生活実態を解決すべく全国に水平社が結成された。和歌山県水平社は、1923年5月17日、江戸時代に身分制度を確立した徳川家に対する抗議を表して「和歌祭り」（徳川家を祝した祭り）の日に結成している。

全国水平社結成の原動力は、差別に対する「怒り」であり、厳しい生活実態にあった。そして、青年や女性が、また子どもが中心となり水平社運動をけん引してきた。日本初の人権宣言と言われている「水平社宣言」は、人の世に熱と光を希求し、綱領で「人類最高の完成に向かって突進す」と高らかにうたわれている。爾来90年、部落の完全解放の歩みは止めることなく今日に至っている。90年の歴史と伝統から学ぶため、今一度議論をまきおこそう。

一方、和歌山県では京都の「オール・ロマンス差別事件」の翌1952年に県議会議員の差別事件が発生し、部落解放委員会が中心となって「差別行政反対」の糾弾闘争を展開した。闘いのなかで、子ども達の被差別実態を明らかにし、県下に子ども会が結成されて60年。当時の子ども達は、差別のため教育を奪われ、長欠、不就学といった実態にあった。学校に行きたくても行けないという差別的教育環境が部落に多く存在し、子ども達の教育の機会均等の権利を保障させる闘いとして、県行政に子ども会の設置を要求し、勝ち取ってきた。それ以降、60年にわたって子どもたちの置かれている現状を直視し、地域で子ども会活動がおこなわれてきた。しかし、部落問題が提起する教育課題を解決すべく、子ども会活動が展開されてきたが、いまだ多くの課題が存在している。親の経済力・教育力が子ども達の進路や学力に大きな影響を及ぼし、進学率の格差を招く結果となっている。

それぞれの節目である本年は、組織の実態を把握し、水平社運動の原動力であった青年、女性、子どもの再結集が急務である。そして「よき日」をめざして歩み続けよう。

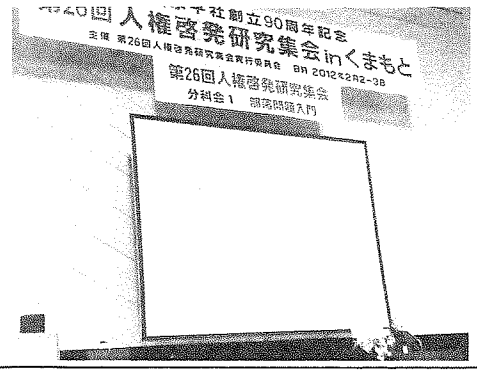
# 差別のあるところに公害が in 熊本

## 第26回人権啓発研究集会

第26回人権啓発研究集会が2月2日～3日、熊本市総合体育館を主会場にひらかれ、全国から約4000人が集まり、和歌山からは5人が参加した。

全体講演1「水俣病から現代社会を考える」では、原田正純・前熊本学園大学社会福祉学部教授、水俣学センター長、医師より、3・11東日本大震災は当初天災でやむを得ないと思っていたが、福島原発事故は水俣病と同じ人災であり、科学技術の過信と負の部分の無視・軽視・想定外といういい訳や国策であるという共通点があること、問題解決には時間がかかり、次世代の影響が懸念される。また、この地球にはまだまだ多くの差別が存在しており「差別のあるところに公害がおこる」ことが訴えられた。全体講演2「私たちがめざす社会とは～誰もが安心して暮らせる社会をめざして～」鎌田實・医師、作家より差別を生み出す人間社会のなかで、どうしたら差別をなくすことができるかということについて話された。

2日目は7分科会と2つのフィールドワークがひらかれた。



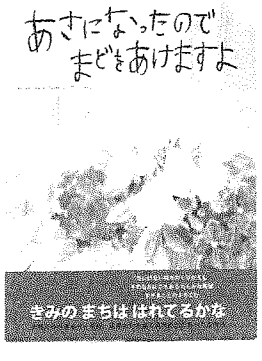
熊本でひらかれた人権啓発研究集会

文化の窓

## 「あさになったのでまどをあけますよ」

昨年発生した東日本大震災後に「絵本作家として何ができるか・・・」と悩んだ作家から届いた一冊。「朝、起きたらカーテンをあけることだな」と思いつき、生まれた絵本。

朝、窓をあけて見える風景のなかに、生きる希望がみえる。




●著者：荒井良二、
発行：2011年12月、偕成社、
ISBN978-4-03-232380-1